

【歴史&宗教 No003】私の般若心経 解釈

「般若心経」の字句の解説ではなく、人間の心の実相を踏まえた私の感覚のことである。

1. 六道輪廻

元々は古代インド思想が起源と云われ、後に仏教に取り入れられたものという。図(表)－1 ab (ウィキペディア他より拝借) のとおりで、六つに分けた心の世界である、普通は死後に行った後のあの世のことと言われている。この六つの世界を何度も行き来して生まれ変わりながら、輪廻転生するという考え方である。しかし、宗教学者によっては生きている人間の教訓と解釈すべしという見識もある。仏さま(悟りを開いた仏陀)にならない限り、この六道輪廻の世界からは、脱出(解脱)出来ないと云われている。つまり、六道の無限ループにいる限り苦しみや煩惱に悩まされ続ける。そういう処から様々な信仰が生まれて来たと言われる。

図(表)－1 a		
六道の世界		人間界への転生
三善趣 (三善道)	天道	人間の世界より苦が少なく楽の多い世界をいう。
	人間道	我々人間が住む世界で、生病老死の四苦八苦で悩む状態をいう。
	修羅道	独善的で、欲望を抑えることが出来ず、我を忘れて怒り・戦いを繰り返す状態をいう。
三悪趣 (三悪道)	畜生道	・人間以下の動物性が跋扈する弱肉強食の世界 ・動物的本能のままに行動する状態
	餓鬼道	・強欲で非情な人間の成れの果ての世界 ・満たされない欲望により、心身ともに苦しむ状態
	地獄道	・快樂のない苦しみだけの世界 ・六つの世界で最も激しい苦しみを追う状態

この大きな世界の中心には、輪廻の原因となっている煩惱――

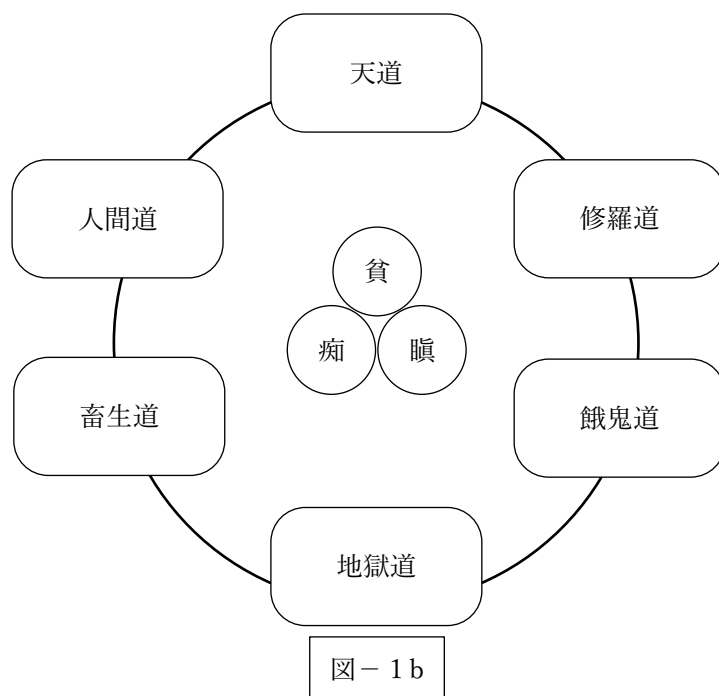
『貪』(むさぼり・必要以上に求める心)

『瞋』(怒り・憎しみ・妬みの心)

『痴』(おろかさ・愚痴・無知)

の三毒が居座っている。

悟りを開いたお釈迦様(仏陀)は、人間の持っている本当の姿について、人を殺す心もあれば、生かす心もある。嘘をつく心もあれば、真実を語る心もある。慈しむ心もあれば、憎悪する心もある・・・そうした様々な心の全てを抱えているということをおっしゃられたとい



う。（待てよ、仏陀は本当にこんなことを言ったのか、後世の弟子が作ったのか？） したがって、「貴方の心の中には、既にお釈迦様のように——お釈迦様（仏陀）は六道輪廻の世界を超越して悟りに至った人。——素晴らしい慈悲深い精神が宿っている、他人を殺めるような醜い心は、本来は無いのです。」などと偉そうに言う僧職は、嘘ということになる。このとおりで、六道輪廻の世界を超越して悟りに至った人は、仏陀ただ一人である、悟りを開いたからこそ六道輪廻の世界を整理出来たとも言える。

「日本仏教の母山」と言われる比叡山で修行した浄土宗の開祖・法然、浄土真宗の開祖・親鸞、臨済宗の開祖・栄西、曹洞宗の開祖・道元、日蓮宗の開祖・日蓮、時宗の開祖・一遍、阿弥陀聖と称される空也などは日本仏教各宗各派の祖師や高僧・名僧と称され、一宗教のみならず日本文化、大和民族日本精神に多大な影響を与えた人達である。彼らの書籍の本の一部を読み齧っているが、皆、「生身の人間には既にお釈迦様同然の心が備わっている、後は気付かせてやるのが自分達の役目である」と説いているような気がする。例えば、浄土真宗の親鸞は「南無阿弥陀仏」の六字を唱えると仏の世界の極楽浄土（悟りの世界）に直行する、だから「南無阿弥陀仏」と唱えよと言った、その思想を広めんとしたのが空也等の念仏聖・念仏行者だった。

しかし、常々、私は自分の中には、「仏性（慈悲深い人格者、仏陀となるべき可能性）と魔性（欲望界・煩惱界を支配する悪魔の性）と、真逆の性格の二人が住んでいることを自覚する、つまり、六道界で右往左往している『同居仏魔』である。」と述べているが、お釈迦様のおっしゃるとおりでほっとしている。

2. 般若心経

正式名称『般若波羅蜜多心経』について、数多の識者が数多の解説本を発売しているのですが、ここでは一つ一つの語句を解説するものではない。まずは般若心経とその文字数を図(表)－2に整理してみた。

仏説・摩訶・般若波羅蜜多心経	①12 文字
観自在菩薩、行深般若波羅蜜多時、照見五蘊皆空、度一切苦厄、舍利子、色不異空、空不異色、色即是空、空即是色、受想行識亦復如是、舍利子、是諸法空相、不生不滅、不垢不淨、不増不減、是故空中、無色、無受想行識、無眼耳鼻舌身意、無色声香味触法、無眼界、乃至無意識界、無無明亦、無無明尽、乃至無老死、亦無老死尽、無苦集滅道、無智亦無得、以無所得故、菩提薩埵、依般若波羅蜜多故、心無罣礙、無罣礙故、無有恐怖、遠離一切顛倒夢想、究竟涅槃、三世諸仏、依般若波羅蜜多故、得阿耨多羅三藐三菩提、故知般若波羅蜜多、是大神呪、是大明呪、是無上呪、是無等等呪、能除一切苦、真実不虛、故説般若波羅蜜多呪、即説呪曰、羯諦羯諦、波羅羯諦、波羅僧羯諦、菩提薩婆訶。	②262 文字
般若心経	③4 文字
合計 (①+②+③)	278 文字
冒頭の『仏説』を除く	276 文字
『仏説・摩訶』を除く	274 文字
図(表)－2	

私は次のように思っている。お釈迦様は、前記のとおり「人間は地獄界から仏界までの十の世界の心を、全て持ち合わせているのだ、そして、その間を行ったり来たりしているのだ。」と言明されたが、す

なわち人間の心は移ろい易く迷い彷徨うものである、だからこそ、導ける、救えるのだとおっしゃられている。その教える方と教わる方の同期を促す啐啄同機そったくどうきの要諦——物事の肝心要のところを示したのが般若心経であろう。私のここでいう教える方とはもちろん仏陀であり、教わる方の人間が般若心経の教えを実践する努力なくして、啐啄同機そったくどうきは起こらない。私は般若心経の教えは平易・端的に言えば、「飽くなき向上心を持って生涯学習に励めよ！」だと思っている。識者の言葉を借りれば「心を、もっと大きく大きく、もっと広く広く、拘るな、拘るな、“空”ずることだ」ということであろう。

その1；神前でも通じる

自宅にある「般若心経」が記述されている折り畳み式の勤行帳には「神前にては宝の御経、仏前にては花の御経」と書かれており、神様も般若心経読誦どくじゆを喜ぶのである、神仏習合時代の名残だろうが、今も山伏・修験者の流儀は、自然界、つまり、神仏を分別しない世界を相手にすること——アニミズム信仰——から、どこでも般若心経を唱えているだろう。仏教関係者が神前で読経する場合や、神仏混淆を是とする山伏・修験者は「仏説」を省いて読経・読誦しているとされる。私は如何なる場合であっても「仏説」は読み上げない。

その2；心経は誰のため？ 自分のために！

私の実家（生家）には仏壇はなかったが、「般若心経」は、中学生の頃、夏のお盆の時に親戚を訪れた時に初めて知った記憶がある。自宅においては2006(H18)年1月7日母親が亡くなったことから、仏壇を設置し、それ以降毎日の勤行を習慣化した、また、菩提寺との付き合いが始まったこと故に、はたまた定年翌年2010(H22)年からの私の「古道トレイル&へんろトレイル」スルーハイク遊学紀行（一気通貫歩き旅）における神社・仏閣で般若心経を唱えて来た。昔（以前）は、般若心経と言えば、葬式・葬儀の時に唱えるものだと単純に認識していた。亡くなった人の仏霊・神霊にしてもその魂供養のためのお供えとして読誦するものだと思って来た。あるいは、亡くなったかは別にして、靈魂に対する供養、つまり、「故人のために」と長年思って来た。

がしかし、今ここに至って、唱えたその人自身のためのも、「今生きている自分ため」に唱えるものであると気付いた。私の解釈の理由は次のとおりである。

- 1；「故人・他人様に捧げよ。」とは書かれていない、書いていない、成っていない。
- 2；生前にその人の犯した罪・穢れ、絡んだ禍事まがごと（凶事、災難）を許すなど一言もない。
- 3；「死んで天国の極楽浄土にいる皆様方を供養せよ。」とは書かれていない、書いていない、成っていない。
- 4；そもそも死んでしまった人がいるという前提のあの世の世界（極楽浄土か、阿鼻叫喚の地獄なのか）は一言も語られていない。
- 5；そもそも死んだ人が渡るとされる三途の川と、生前の諸行を裁く閻魔大王（あるいは、懸衣翁けんえや奪衣婆・姥）との係りは書かれていない、書いていない、成っていない。
- 6；極楽国土を描く「有七宝池（うしっぽうち）八功德水（はっくどくすい）充滿其中（じゅまんごちゅう）」がどこにも出て来ない。
- 7；後記5頁「・1」～「・5」のような意図は何も書かれていない。

書いてある内容は、

- 1；冒頭に「観自在菩薩」を置いたことに言わんとする最大の意義を表現している。「今の自分の存在が菩薩であることを観よ。」今生きてこの経を読んでいるこの自分を観る、とある。（菩薩とは、悟りを開いた仏様直前にあって修行中の者）
- 2；276文字は、全て今生きている生身の吾が身の心の修養を論じていることが分かる。
- 3；心経全文の教えについて、書籍を以って少し齧ったが、仏陀（お釈迦様、弟子達）から読む人へ、すなわち生きている人間に対する呼びかけ、問いかけである。死人・故人に対する言葉は一言もない。

しかし、多くの国民は「般若心経は死者・故人供養のためにある。」と直感していると思う。なぜ、自分のためにあると理解されないのか、それは、僧職や寺院関係者の言動に責務がある。唱えるかどうかは、もちろん宗派によるが、唱える宗派では、

- ・葬式・葬儀の時には必ず唱える、参列者にも読誦を強制している。
- ・年忌法事（法要）の時には必ず唱える、参列者にも読誦を強制している。

他方で、

- ・招請されて出席した講習会・研修会の場合（葬儀・法要とは無関係）において「般若心経」を唱えていない。
- ・「神前には宝の御経、仏前には花の御経」と言いながら、おめでたい慶事の場合において「般若心経」を唱えない。

仏陀の教えに帰依している僧職が「今生きている自分ために唱える」ことを真に理解していない、経の言わんとすることが血肉になっていない、経を葬儀・法要の道具・パフォーマンスと捉えている、からだと思う。

その3；仏陀の教えの“究極のエッセンス

般若心経は、大乘仏教に分類される膨大な大般若經典群（600巻）の思想の核心を簡潔に説いた仏典ということである。また、仏教は悩める人間の自己救済（現世利益の目的ではない、現世利益は神道）にあると云われる、その目的を叶えるためのエキスが心経である、読んで見てそう感じる。完成させたのは、中国の玄奘（三蔵法師）だが、すると生身の人間が作ったものである。

現世利益とは具体的な子孫繁栄とか五穀豊穰とか身体健吾とか、物質的な欲求であるが、自己救済とは精神的要求である。

あの世の聖地須弥山とか、極楽国土は「有七宝池 八功德水 充滿其中」されるが、死んでしまった人間がそんな所に行くとしても、生きている生身の人間からすれば偽造・偽作のことと分かり切っている。そんな所を夢見るために膨大な仏典が造られた訳ではないだろう。そう心経は、悩める人間の自己救済のためのエッセンスを凝縮した仏陀の教えである。私はそう思えば、「今生きている自分の向上心、真善美の精神を鍛える急所が詰まっている。」という理解が出て来る。

その4；般若心経（仏陀の根本教義）の神髄

般若心経の教えの最もシンボリックなキーワードは『空（あるいは無）』と謂われ、対する認識（文字）は『色』である。「色」は見えるもの、形あるもの、意識や存在の全ての実体・実態・実像と謂われます。仏教（仏陀の教え）の真髄は「色不異空、空不異色、色即是空、空即是色」である。同じことを

4回繰り返しているのである。『色は空に異ならず、色はすなわち空なる。空は色に異ならず、空はすなわち色なる。』という。目前の様々な現象は朝露の如く一瞬のこと、同じことを4回も繰り返しているのは、「こだわるな！とらわれるな！執着するな！」仏教の真髄というところではないか。難しい教義・理論のことは分からないが、「こだわるな、こだわるな、こだわるな！」「今のそのまま、ありのままをスタート台にして最高・最長不倒を目指せ。」だと思ふ。端的に言えば、「日々に維新を！日々に自分を開発・拡充せよ！日々に創発を！」「自分を守旧するな！」だと思ふ。素直に全体を読めば、般若心経の神髄は「無・空・中」だと理解している。しかし、「こだわるな、こだわるな、こだわるな！」という、そう思っていること自体が「こだわり」に執着しているのだと諭される、言われればそうだろう。

別の切り口、華嚴経との関連からは、この「空（無）」とは、虚無（空っぽ）ではなく、また、色（実体）の否定でもなく、したがって、「色不異空、空不異色、色即是空、空即是色」は、個別・個体は単独では存在できず（存在せず）、他の存在に依存・依拠してこそ、共生してこそ初めて個の存在が成立し相互承認されるのだということである。私はこのような認識を平易に対等互啓（恵）と称している。

その5：「般若心経を葬儀で読む理由」とは？

私は、そもそも「葬儀や法事で般若心経を読む（唱える）理由は何か」という疑問があった。私がかここで求めるのは、学問上の難解な理由ではない。

そこで、ネット上でいろいろ調べて見た。主なものを要約すると次のとおり。

- ・¹ 「死者供養」だいう。供養とは、もとは供給資養という言葉の簡略語、供給とは文字通りお供えをすること、資養とは資（元手）を養うこと。よって般若心経はその供物の一つだとする。
- ・² 故人をあの世へ導いたり、やすらかに眠るように伝えたりする役割がある。また、大切な人を亡くして心を傷めている遺族や参列者を癒す役割も果たす。
- ・³ 小乗仏教は、仏教の修行をしている人のみが悟りの境地に辿り着くのに対し、大乘仏教は仏教の修行をしている人、してない人も全ての人を悟りに導く教えであり、般若心経の考え方は、大乘仏教に属する。
- ・⁴ 空の思想には個別の物事に捉われない、執着しないという考え方は、全ての人（故人も）が悟りの境地に至れるとされている。
- ・⁵ 葬儀での読経は故人の冥福を祈るのに対し、法要の読経は唱えることで得られる自分の「徳」を、故人へ回し向ける「^{えこう}回向」の考えに基づき行われる。

般若心経は「元々は、死者・故人に向けたものではなく、生きている人（弟子）に向けて仏陀が話された。」と言われるように、私は幾度となく読んで見て、そのとおりだと思ふ。

上記「・¹」～「・⁵」は、もっともらしいが、般若心経の文面からして、故人に向けられたものでないのに、なぜ故人に結び付けるのか、屁理屈や独善で繋げている金儲けの悪臭がプンプンする。当然である、なぜならば、それらは僧職や葬儀屋の言葉だからである。

それでは、「葬儀や法事で般若心経を読む理由は何か」ということについて、専門性の高い宗教学者の明解な理由を探し求めているが、まだ、探しあぐねている。

私は、その始まりの根底には、アニミズム観、靈魂観という考え方があつと思ふ。死んで生身の人間ではなくなり、肉体は消える、土に返るが、その人の生前の諸々は見えない靈魂というものに凝縮されて引き継がれ、その靈魂は永続するという思想にあると思ふ。その上で、「偽善の慰め」の行為であろうと思っている。

「般若心経の教えのように悟りを開くことが出来なく、志半ばで死んでしまった、無念・残念だろうと同情し、可哀想であると思ひ、他方で、生身の私は生きていて般若心経の教えの悟りを開くべく努力修養を積んで行くが、申し訳ないという気持ちもある。そこで、死者・故人の靈魂に向かつて、一緒に悟りに向けて頑張ろうよ。」ということだろう、それが後付けの「回向」の考え方となったものであろう。すると、般若心経と回向が固く結び付いて、死者供養のツール（セット）になったということではないかと想像している。僧職を一つの職業とその金儲けの一手段としているからであろう。

もう一つが、僧職の特権意識の表れの一面ではないのか。俺らは仏陀と遺族（民）との間にいる仲介者である、よって、般若心経は「無・空・中」崇高な内容になっているが故に極楽浄土に導けるのは我々である、として、遺族の悲しみに便乗して特権化して来た証であろう。

その6；回向文、あるいは回向偈という経

「回向」とは、「回」は回轉、「向」は趣向の意であり、自分自身の積み重ねた善根・功德を相手に振向けて与えることをいう。私は、これまで様々な仏事に参加し、般若心経を唱えて来たが、最後に必ず次の回向文、あるいは回向偈という経を読誦させられて来た。まさに、趣旨は、ここで唱えた供養の心が、参加しなかった者にも、この功德が及びますよということだろう。

願以此功德（願わくは此の功德を以て）

普及於一切（普く一切に及ぼし）

我等与衆生（我等と衆生と）

皆共成仏道（皆共に仏道を成ぜんことを）

しかし、この言葉を読むことに疑義のひらめきがあった、そのような絡繰りに気付いたのは四国2回目へんろ——2017(H29)年 68歳 4/4(火)~5/21(日)——を終わった直後であった、それ以来は唱えていない。

私は、自宅で毎日の朝食前に仏壇・神棚に向かい正座して勤行しているが、省いている、唱えないようにした、なぜならば、次の理由による。

- ・「般若心経は、私自身の心磨きのために唱えるもの、私の内（中）にいるもう一人の自分との誓約の儀式であり、他人や故人のために唱えるものではないこと。
- ・私の言動が他人様に及ぶよよととか、他人様に功德が行き渡るよよととか、故人の靈魂に通じるよよととか、そんなおこがましい、傲慢な心を以って唱えるものではないこと。
- ・般若心経の神髓は「無・空・中」だが、仏魔同居をはっきりと自覚出来る私が、他人様に示せるほどに立派な人間としての生き方を備えていなこと。

もしも、この回向文、あるいは回向偈という経はとても価値の高い素晴らしい教えであるというならば、そう弁ずる人は、一切法令に抵触する言動を取ったことはないか？と問いたい。一切法令抵触はないというならば地球上80億人が認める証明を立てなさい！と言いたい。もちろんそんな人は誰一人として存在しないだろうから、回向文、あるいは回向偈に価値があると他人に向かつて立派そうに言う人は、似非・偽のイカサマ宗教者ということである、言明出来る。よって、“普通は意味も分からず惰性で読んでいる”と言うのであれば私は許す。要は、自分の世界に収めるのであればその方法・手段を問わず問題にしない、しかし、人様の前で偉そうにしゃべったならば100%立派でなければならないだろう。

その7；菩薩の次の段階、悟りを開いた仏様の立ち位置

悟りを開いた仏様（仏陀）と手前の菩薩については、太陽と太陰を図(表)－5のように結び付けて見た。

太陽（日）	自ら光を発する	仏陀
太陰（月）	日の光を貰って、反射光を発する	菩薩
図(表)－5		

世の人間には、「俺がオレ我」と、自分が中心にいて、自己主張の全ては間違いない、と増上慢・鬼の天狗鼻を誇示して、太陽の如しと妄想している者が実に多いことかと思っている。中心にいる太陽と自負するのであれば、光を発することのみに・与えることのみに集中しているか、つまり、全身全霊を以って無償奉仕、無償貢献しているかということの命題を提示したい。

菩薩においても六道輪廻の無限ループの中で修行中である、日の光を貰って、つまり、他人様から縁を貰って、光を貰って反射光を発しているに過ぎないのだと謙虚になっているか、と問いたい、自問自答している。

3. 仏教と蓮

「仏」「仏教」に係る「もの・こと」には必ず「蓮（の花）」が登場する。なぜなのか、殆どの方が知っているとおりに、蓮は泥の中（水中）で育ち、きれいな花を水上に咲かせる。生育の姿を娑婆の人間に重ねて、半分はまさに煩惱まみれの汚れた六道の世界でもがいている。しかし、半分は理想郷を探し、理想精神を喚起し、向上心・向学心燃え盛るきれいな世界をも持っている。蓮と人間の両者はぴったり重なる生き方ということである。まさに仏教のようずい腰髄に通底する、だから、仏教の象徴は「蓮（の花）」となったのだろう。蓮は種から芽が出て生育する過程は、蓮の半生は泥の中である。一所懸命生きた結果、やっと水面下に顔を出し、そして、水上にきれいな花を咲かせる。泥はいやだからということで種が水面に浮かんでいきなり花は咲かないのである。

私は穿った見方をしている。泥で比喻した醜悪な社会を潜り抜けて、表では建前では立派なことを言う、しかし、以前として半身は泥の中だから、すなわち裏・本音は醜悪のままでもいいじゃないかということ許容しているとも理解している。これを悪用するのが、言行不一致の、「知行合一」を理解できない娑婆の宗教者である。娑婆の諸々の醜さやドロドロした人間関係や、諸々の執着・煩惱の世界・社会を乗り越えて、抜け出して真善美の生き方すべしと、他人の前で立派な言葉を垂れるだろう、このことを仏教者のみならず神職・聖職（宗教者）は人前で説く。しかし、自分はどうなのか？ 公衆の面前で披瀝したその言葉、世間に流布させた書籍の文字の通りに実践・実行していない宗教者は偽物である、仏陀の教えを説く資格はまったくない。

(end)